

新刊紹介

柏木 博・小林忠雄・鈴木一義 編 講談社

『日本人の暮らし—20世紀生活博物館—』

中野紀和

20世紀が終わろうとしている。数年前から、今世紀を振り返るさまざまな試みがなされている。本書もまた、その副題が示すように、今世紀の庶民の生活とその変遷を記録しようとしたものである。専門書としてだけでなく、一般の読者を想定しているため、比較的読みやすいものになっている。本書の執筆者の一人として、キーコンセプトを示しながら、本書の紹介をしたい。

20世紀の100年は、明治・大正・昭和・平成と4つの時代にまたがるが、それは表面的な変化ではなく、生活の質そのものが変わった100年である。時代の節目を彩る大きな事件が、さまざまな文献に記録され、歴史の表舞台を形成する一方で、それぞれの時代を支えてきた庶民の普通の暮らしは記録されていないことが多い。これらは、記録ではなく、むしろ記憶のなかに生きてきたといえよう。そのようなひとびとの記憶や体験を軸に、あらためて20世紀という時代をとらえようとしたのが本書である。

一口に記憶といっても、「あの頃、・・・があった」という「もの」や「こと」の思い出や、具体的に思い出す作業だけをさすのではない。「もの」を使うことで、身体や動作に刻み込まれた無意識の記憶がある。感性もしかりである。「こと」を語ることで、家族や地域での人間関係までもが浮かびあがってくるように、語りの背後に浮上する記憶もある。本書を通底するのは、これらの記憶を歴史的記録と照合させつつ、等身大の生活を描こうとする執筆者たちの姿勢である。鳥の目で上から眺めた20世紀ではなく、地を這う蟻の目からみた20世紀のひとつの姿がそこにある。執筆者は30歳代から70歳代と幅広いが、以上のような共通認識をもっていることを示しておきたい。

次に、本書の構成であるが、大きく「第1章 もの」「第2章 こと」「第3章 ひと」「第4章 はなし」に分けられている。各章を構成するタイトルが興味深い。第1章の「めし食ったか?」「母のいる台所」、第2章の「風呂好きな日本人?」「おばあさんの一日」、第3章の「耕耘機が来た」、第4章の「連絡と電話」などであるが、これらはほんの一例である。

付け加えておきたいのは、本書の試みは、過去を振り返り「昔は良かった」などと回顧主義によるものではない、という点である。時代が明治から大正へ、大正から昭和へと変わったからといって、日々の生活がとぎれるわけではない。たとえば、今、流行りのインターネット。明治10年

に日本に初めて電話機が輸入されてから現在のインターネットに辿り着くまでには、ラジオやテレビの普及があり、数え切れない改良が重ねられてきたことはいままでもない。脈々とつながる技術があるからこそ、その先に、われわれは 21 世紀の技術の具体的なありようを描くことができる。生活全般についても同様である。だからこそ、この 100 年の生活のありようとその変化を記録することに意味があるのである。